

# 文化財建造物の活用 ～香川大学と教育委員会との連携事業～

山本 珠美

- I. はじめに～実施の経緯～
- II. 実践事例
  - II-1. 細川家住宅（さぬき市）
  - II-2. 宇夫階神社と西光寺船屋形茶室（宇多津町）
  - II-3. 林求馬邸（多度津町）
  - II-4. 猪熊家住宅（東かがわ市）
- III. 成果と課題

## I. はじめに～実施の経緯～

本稿は、平成27年度から平成30年度まで4年間実施した、香川県内の文化財建造物の活用にかかる香川大学生涯学習教育研究センター（平成30年度から地域連携・生涯学習センターに改称）と県内自治体教育委員会事務局文化財部門との連携事業に関する報告である。

香川大学と香川県教育委員会は、平成18（2006）年3月29日に「生涯学習政策アドバイザーの派遣に係る国立大学法人香川大学と香川県教育委員会との協定書」を締結している。同協定書は第1条に「香川大学は、生涯学習政策への助言、生涯学習・社会教育に関する相談や調査研究を通じ、生涯学習の振興に資するため、生涯学習教育研究センターの専任教員を生涯学習政策アドバイザーとして香川県教育委員会事務局生涯学習課に派遣する。」とその趣旨が述べられている（生涯学習課は、現在、生涯学習・文化財課）。本協定により、筆者は生涯学習政策アドバイザーとして生涯学習・文化財課に隔週水曜日午後派遣され、生涯学習に関する政策について同課職員と意見交換をしている。

平成26（2014）年12月、文化財担当の職員から文化財活用について課題が多いという現状を聞いた。国の文化審議会は「今後の文化財保護行政の在り方について」（平成25年12月13日）において「文化財は、単にそれらを限られた人々で守り、価値を損なうことなく後世に継承していくという「保存」の観点だけでなく、地域においてより多くの人々に対して公開し、鑑賞してもらい、親しんでもらうという「活用」の観点からも、その保護を図る必要がある。」と謳っている。それを受けて、香川県教育委員会『平成26年度教育施策の概要』においても文化財の保存と活用の推進を挙げているものの、人手と予算の制約から活用までは手が回らず、今後改善が必要な状況であるということであった。加えて、専門家が行う文化財講座は得てして難解になりがちである。高度な専門知識を使わずに、それぞれの文化財の価値を分かりやすく一般の人に伝える方法はないかという悩みもあった。

その解決策として大学と教育委員会が連携する本事業のアイデアが浮上した。平成27年度は、手始めに、筆者が担当している教育学部社会教育課題研究Ⅱの授業で、県の補助金により萱葺屋根の修理が完了

したばかりの重要文化財細川家住宅の活用について検討・実施することとなった。必ずしも文化財の研究をしているわけではない学生に、専門家と一般の人々（子どもを含む）の間をつなぐ「翻訳者」の役割を担ってもらおうと考えたのである。その取組が成功裡に終わったことから、以後平成30年度まで、同様に県内の文化財建造物の活用を同授業で検討し、ワークショップや講演会等公開イベントの実施、あるいはパンフレットの作成に取り組むことになった。

本稿では、Ⅱ章で4年間の取組を文化財建造物ごとに具体的に報告し、Ⅲ章では取組の成果と課題について検討する。

## Ⅱ. 実践事例

### Ⅱ-1. 細川家住宅（さぬき市）

江戸時代中期、18世紀中頃に建てられたと推定される農家建築の重要文化財細川家住宅（昭和46年6月22日指定）は、既に述べたとおり、平成25～26年度に県の補助金事業として茅葺屋根の修理を行ったことから、担当課の生涯学習・文化財課はその成果を広く県民にアピールしたいと考えていた。また、文化財建造物の中でも個人宅は社寺等に比べて所有者の意向もあり公開が難しく（主に防犯の面）、あるいは、仮に公開の意向を持っていたとしても、どのように公開すれば良いか方法が分からないという課題を抱えている。そこで、初年度の試みとして、個人宅の細川家住宅で子ども対象のワークショップを実施することとした（なお、活用を検討する文化財建造物は、毎年度、生涯学習・文化財課からの提案であった）。

社会教育課題研究Ⅱでは、学生の交通費やワークショップの材料代等を支弁するため、事前にフィールドワークのための経費を大学に申請し、獲得していた。その経費によって、現地を計3回訪問した。1回目（5月10日）は細川家住宅の特徴を把握するため、文化財建造物保存技術協会の瀬尾雅之氏を講師としてお招きし、江戸中期の農家建築の基本を理解した。この1回目の訪問で学生の印象に強く残ったことが、自然素材からなる日本建築の風通しの良さであった。ワークショップの実施時期を夏に設定していたこともあり、季節にあった「風鈴作り」というアイデアが生まれた。また、細川家住宅の敷地内には多くの棕櫚が生えており、その葉っぱを使った「草遊び」という提案も出てきた。

2回目（6月24日）は、それまでに検討したワークショップの進め方を現地で確認するとともに、ワークショップに参加するさぬき市立前山小学校を訪れ、秋友校長と事前打ち合わせをした（ワークショップは一般公募で行うことも検討したが、初年度ということもあり、近隣の前山小学校の全児童（11名）を対象にクローズドで行うことになった。前山小学校への交渉は、県の生涯学習・文化財課とさぬき市教育委員会事務局が担当した）。

3回目（7月14日）がワークショップ本番であった。最初に30分間、江戸時代の建物である細川家住宅と現在の住宅との違いについて、履修学生（3名）が講師役となり、事前に作成したワークシートに従って学習した。その後、60分間工作の時間を設け、小型植木鉢とボタンを使ったオリジナル風鈴と、棕櫚の葉を使ったバッタを作った。

なお、細川家住宅を紹介する既存のパンフレットは大人向けに書かれたものであり、子どもには難しいことから、子ども用パンフレットを作ることになった。パンフレットの内容は、ワークショップのために用意した文化財学習のためのワークシートを、当日の反省を踏まえ改訂したものである（A5版、全8頁、カラー刷、500部）。パンフレットは（その元となったワークシートも同様であるが）、分かりやすくするために簡単なクイズ3問に答える方式としたが（問1. 建物の特徴、問2. 昔の暮らし、問3. 建てられた時代）、そのスタイルは次年度以降にも継承された。パンフレットは所有者の細川文夫・誠子氏が管理

し、大人向けのパンフレットと一緒に現地に置いて頂くことになった。

細川夫妻には、3回の現地訪問時に多大なる協力を頂いたが、本事業によって子どもたちが文化財に親しむきっかけになるのではないかと評価を頂いた。前山小学校の先生・児童からは後日お礼の手紙が届いたが、ある6年生児童の手紙は次のようなものであった。「このまえは、細川家住宅でいろいろなことを教えてくれてありがとうございました。私が教えてもらって分かったことは、かやで雨をふせげるといことです。ふうりん作りでは、お兄さんお姉さんがやさしく、分かりやすく教えてくださったおかげで、とても上手にできました。ふうりんの作り方を教わったので、家でも作ってみたいです」。また、県生涯学習・文化財課からは学生が「翻訳者」になって文化財理解を深めるという取組が期待以上のものであったと高く評価して頂き、翌年度も継続することとなった。



バツタ作り



風鈴作り



完成作品を持って記念写真



パンフレット



後日小学生から頂いたお礼状

# 地域の文化財に親しみを

子どもに地域の文化財への親しみを深めてもらうようと、香川大などは、さぬき市多和にある国の重要文化財・細川家住宅で小学生対象のワークショップを開いた。参加した児童は建物の歴史や仕組みを学ぶとともに、住宅内で風鈴づくりなどにも挑戦し、大学生らと交流を深めながら楽しいひとときを過ごした。

山本珠美・同大生涯学習教育研究センター准教授の講義「生涯学習概論」の一環として、県教委、市教委の協力を得て14日に初めて実施。同大教育学部3年の学生3人が講師役を務め、地元の前山小学校の全児童11人が参加した。

細川家住宅は江戸時代中期に建てられた18世紀初期の民家の姿をとどめる典型的な農家建築で、1971年に国重文に指定された。

香川大などワークショップ



大学生と一緒に作った風鈴などを見せ合う児童たち  
—さぬき市多和

2013、14年度には「ツクアレ」と呼ばれる特徴的なかやぶき屋根などの改修を行っている。

児童たちは学生から説明を聞き、柱の接合部にくぎが一本も使われていないことや、わらで屋根ができていくことなどを学習。続いて竹床の座敷に上がり、植木鉢とボタンを使った風鈴づくりと、シュロの葉っぱを使ったパッタの模型づくりを体験した。6年の将木海琴さん(11)は「わらだけで屋根ができていくことに驚いた。大学生が優しくて工作も楽しかった」と声を弾ませていた。

ワークショップの運営にかかわった中国人留学生の張育さん(22)は「日本の社会教育に興味があって受講している。準備がすごく大変で、不安もあったが、子どもたちに喜んでもらえて良かった」と話した。

## 前山小児童 細川家住宅の歴史学ぶ

四国新聞 平成27年7月18日

注)本文中の「生涯学習概論」は「社会教育課題研究Ⅱ」の間違い。

### Ⅱ-2. 宇夫階神社と西光寺船屋形茶室 (宇多津町)

平成28年度は宇多津町の宇夫階神社と西光寺船屋形茶室を主たる検討対象とした。1200年以上の歴史を有する宇夫階神社は、境内に国の登録有形文化財を10棟有している。平成16(2004)年11月8日に登録された本殿は、昭和48(1973)年7月30日の火事の後に、伊勢神宮外宮の旧多賀宮御正殿を丸ごと一棟移築したものである。伊勢神宮の各建造物は式年遷宮により20年ごとに建て替えられるが、その際古い建物は解体され「御古材頒賜」として木材が一本ずつ全国各地の神社に配分される。そのため古い建物がそのまま残ることはないのだが、宇夫階神社の場合、火事による全焼と式年遷宮がほぼ同時期であり、特例として一棟丸ごと宇夫階神社に下賜された。これは極めて珍しい事例であるという。他にも、末社塩竈神社本殿、同拝殿及び幣殿、末社金刀比羅宮拝殿及び幣殿、忠魂社本殿、神饌殿、神輿蔵、雑庫、齋殿、社務所の9棟が平成22(2010)年4月28日に登録されており、境内全体に多くの文化財が存在している。

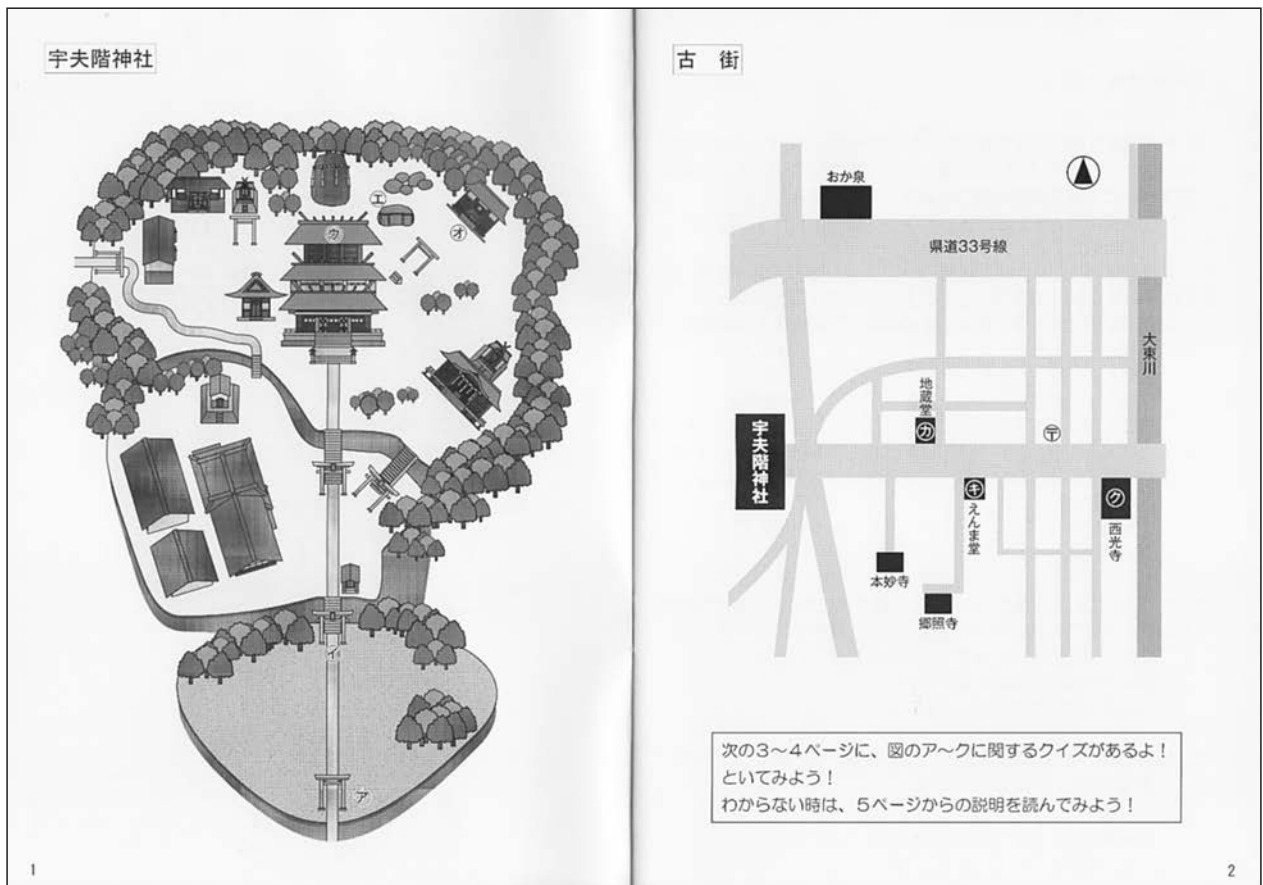
加えて、宇夫階神社の一带は「古街」と呼ばれ、社寺をはじめ古い街並みが残っているエリアである。その中の一つ、香川県指定有形文化財(昭和44年4月3日指定)の西光寺船屋形茶室は、もとは旧多度津

藩の御座船（参勤交代の際に藩主の乗る豪華な船）の屋形である。明治になって参勤交代がなくなり船が不要になったため、屋形の部分だけを切り離して移築し、茶室として使用したのであるが、同様の事例は全国に3例しかなく貴重なものとされている（船屋形茶室は普段は雨戸を閉めた状態であるが、年2回、雨戸を開け、中が見えるように公開している）。

これら文化財建造物一群を活用して何かできないかと検討したのが、平成28年度の試みである。

取組にあたっては、宇多津町教育委員会事務局生涯学習課の西山誠二氏からの提案により、平成16年度から町の事業として夏休み期間に実施している小学生対象の体験講座「宇多津寺子屋事業」の一部に組み込むこととなった（大学との連携ははじめてであった）。西山氏は平成27年度の社会教育主事講習（開催校：香川大学）で社会教育主事の資格を取得した方である。授業（社会教育課題研究Ⅱ）にも度々参加され、大学生の考える事業企画案について現場の立場から意見を述べるなど、学生との信頼関係も十分築かれた。

検討を重ねた結果、平成27年度と異なり、文化財建造物が一棟だけではないので、街全体を使ってクイズラリーをすること（宇夫階神社をスタートし西光寺を経て宇夫階神社に戻るコース）、クイズラリー中に船屋形茶室で茶道体験を行うことになった。茶道体験は、履修学生の中に偶然裏千家茶道部の部長がおり、提案されたことであった。船屋形茶室は先に述べたように年2回公開しているとはいえ中には入れないよう



になっていたが、西山氏が所有者の西光寺と交渉し実現の運びとなった。さらに、科学実験も入れて欲しいという町からの要望があり、クイズラリーの拠点となる宇夫階神社の氏子会館にて、冷凍庫を使わない手作りアイス講座も行うことになった(手作りアイスのレシピは、牛乳を使用するものと、乳製品アレルギー対策用に牛乳ではなくフルーツジュースを使用するものと、2パターン用意した)。

事業の詳細を検討するため、履修学生(6名)は計3回(4月27日、6月3日、7月15日)現地を訪問し、見学、聞き取り調査および打ち合わせを行った。1回目は会場となる宇多津町古街エリア全体像の把握、2回目はメイン会場である宇夫階神社の宮本守也宮司への聞き取り調査、企画がほぼ確定した時期に行った3回目には当日のリハーサルを兼ねた最終打ち合わせを行った。

クイズラリー・手作りアイス講座の当日(8月3日)は宇多津町内の小学4~6年生の36名が参加した。内容が少々欲張りであったこと、酷暑の中のクイズラリーで体力を消耗したこと等の反省点はあるものの、参加した子どもおよび町民ボランティアの方からは高く評価して頂いた。アンケートでは、ほぼ全ての子どもたちが①クイズラリー、②茶道体験、③手作りアイス、の3ついずれも「良かった」、大学生の説明は「よくわかった」と回答した。自由記述でも「アイス作りはとつてもつかれたけれど、とつてもおいしくてよかった。歩くのはつかれたけれど、いろんなことを知ることができたのでよかったです。さいごに船に入ったのはきねんになりました。大学生がたのしくいろんなことをおしえてくれてよかったです。」(4年生)、「特に私はアイス作りが楽しかったです。理由は分かりやすく教えてくださいましたので、自分たちだけで作ることができ、おいしかったです。他にもクイズラリーはクイズを通して寺、神社のことをよく知ることができました。茶道体験では苦手な味だったけれど、良い体験になりました。」(5年生)と、好評を得ることができた。なお、当日の様子については、事業翌日(8月4日)の四国新聞に記事が掲載された他、宇多津町の広報誌『広報うたづ』9月号(p.6)でも紹介された。

クイズラリーのために用意したクイズ(全8問)およびヒント集は、宇夫階神社および古街に関する先行研究<sup>1)</sup>に基づき、履修学生と筆者で執筆した。事業終了後にも宇多津町で活用してもらおうべく、『クイズで学ぼう!宇多津の文化財』(A5版、全20頁、カラー刷、500部)として印刷製本した。本冊子は、はじめに宇夫階神社と古街のイラスト、続いてクイズ、クイズの解説からなっている。クイズは、次の通りである(下線が引いてあるものが正解)。

<宇夫階神社編>

ア. 宇夫階神社には「大己貴命（おおなむちのみこと）」がまつられています。

「おおなむち」とは多くの名前を持っているという意味ですが、どういう神様なのでしょうか。

- ①功績が偉大で、徳の高い神様    ②ご飯をたくさん食べる神様    ③身体の大きい、強い神様

イ. 神社の参道は真ん中を通ってはいけないことになっています。それはなぜでしょうか。

- ①真ん中に落とし穴がしかけてあるから    ②真ん中は神様の通る道だから  
③真ん中は手すりがないから

ウ. 本殿は、昭和48年に、どこから移された建物でしょうか。

- ①伊勢神宮    ②明治神宮    ③出雲大社

エ. 巨石の上にお皿を置き、その中にお供え物を置いて、豊作かどうかの占いをしていました。

どうなったら、豊作でしょうか。

- ①鳥が来ていっぱい食べて、少なくなっていたら    ②お供え物から芽が出ていたら  
③お供え物の色が変わっていたら

オ. 絵馬にはたくさんの船が描かれています。何の船でしょうか。

- ①海賊船    ②交易船    ③遭難船

<古街編>

カ. 地藏堂の石門はもともと何に使われていたのでしょうか。

- ①船の碇    ②お寺の庭石    ③つけもの石

キ. 浄泉寺の十王堂には閻魔大王がまつられています。「十王」とは人が亡くなったときに生前の罪を裁く10人の裁判官であるとされていますが、閻魔大王は何番目の裁判官でしょうか。

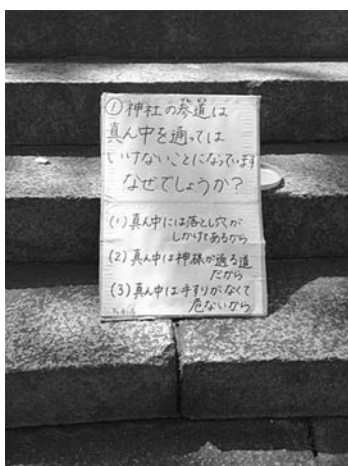
- ①1番目    ②5番目    ③10番目

ク. 西光寺船屋形茶室はどの藩主が乗っていた船の一部でしょうか。

- ①旧熊本藩主    ②旧姫路藩主    ③旧多度津藩主



宇夫階神社氏子会館での手作りアイス講座



宇多津町古街エリアでのクイズラリー



左：クイズラリー途中の西光寺船屋形茶室での茶道体験  
右：事業実施後、宇夫階神社本殿の移築元である伊勢神宮外宮多賀宮を訪問（8月4-5日）



### Ⅱ－3. 林求馬邸（多度津町）

多度津町指定文化財（昭和46年3月31日指定）の林求馬邸は、慶応3（1867）年に建てられた武家屋敷である。林求馬とは旧多度津藩の家老であり、同邸は外国の軍艦から攻撃があったときの藩主の避難場所として築かれたとされている。江戸時代の上級武士の武家屋敷の様子を今に残す建造物であり、林求馬の先代にあたる陽明学者であった林良斎と、大塩平八郎、池田草庵、佐藤一斎などの多くの学者との交流を示す資料が残っている。敷地内には林良斎の私塾「弘濱書院」も復元されている。

林求馬邸は毎月第一日曜日に一般公開しているものの、以前は実施していた講座・セミナーは近年開催されていないということから、平成29年度の事業実施となった。ただし、平成29年度は教育学部社会教育課題研究Ⅱの履修学生が0名であったため、同授業と関連させて実施することは叶わなかった。かわりに、全学共通教育科目の学問基礎科目「書物との出会い（イ）—近代ヨーロッパと現代—」で筆者とともに授業を担当した経済学部の山本裕准教授・張曉紅准教授（いずれも当時）とともに、一般成人を対象とする公開セミナー「近代化と学問—19世紀末アジア知識人の葛藤—」（主催：香川大学生涯学習教育研究センター、後援：多度津町教育委員会、協力：香川県教育委員会）を実施した（10月1日（日））。同授業では、幕末から明治初期の近代化により日本および中国における学問のあり方が「東洋の学問から西洋の学問へ」と大きく様変わりしたことを取り上げている。林求馬の先代林良斎が陽明学者という東洋の学問を担う人物であったこと、林求馬邸は明治維新の直前という時代の変わり目に建てられたこと（建築から150年目に当たること）から、相応しいテーマであると思われたからである。

当日は、下記のようなスケジュールで実施された。ただし、前半の報告が長引き、ディスカッションの時間をあまり取ることができなかった。

13：00～13：05	開会挨拶（田尾勝 多度津町教育長）
13：05～14：05	報告1. 東洋の学問から、西洋の学問へ（山本珠美）
13：05～14：05	報告2. 近世から近代へ（山本裕）
13：05～14：05	報告3. 中国知識人の近代（張曉紅）
14：05～14：15	休憩
14：15～15：00	フロアを交えてディスカッション
15：00	閉会

参加者数は28名、多度津町民が14名、町外からの参加が14名と半々であった。アンケートによれば、内容については「近代化のあり方がよくわかりました。」「特に中国の近代化には興味が出ました。」と好評であった。一方、文化財建造物内でのセミナーということについては、「すばらしい場所で元家老の文化財に触れることができ良かった。」「いつもと違った施設でお話が聞けて大変有意義な時間でした。」という声があった反面、畳の上に座布団を敷いて着座したため「受講環境が悪い、おしりが痛い。」「足が痛い。」という声も少なからず見られた。和風建築で実施することの難しさが露呈することとなった（なお、翌年の猪熊家住宅では、この点への反省から、畳の上に絨毯を敷き、折りたたみ椅子を設置することとした）。

本公開セミナーの詳細については、昨年度の本誌に掲載した「近代化と学問—19世紀末アジア知識人の葛藤—」（『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第23号、2018年、pp.133-151）を参照されたい。

平成 29 年度 香川大学公開セミナー

# 近代化と学問

～19 世紀末アジア知識人の葛藤～



**10月1日(日) 13:00～15:00 林求馬邸** (多度津町大字奥白方 698)

講師：張曉紅(経済学部准教授)・山本裕(経済学部准教授)  
**山本珠美**(生涯学習教育研究センター准教授)

対象：高校生以上 50 名(要事前申込、先着順)

申込：多度津町教育委員会事務局 教育課社会教育係まで TEL：0877-33-0700

無料

香川県内の文化財会場に行われる香川大学公開セミナーを、今年是多度津町の林求馬邸で開催します！  
 慶応三年(1867 年)に建てられた多度津藩家老林求馬邸には、蘭明学者であった林良斎が大塩平八郎や池田草庵などの多くの学者との交流を示す資料が残っています。しかし、林求馬邸が建てられた直後に明治維新がおり、日本の学問は蘭明学をその一部に含む東洋の学問体系から西洋の学問体系へと、大きくシフトしました。  
 東洋の学問の発祥地である中国でも、近代化(欧米化)と無縁ではいらませんでした。日本と中国の知識人がどのような葛藤の中で西洋の学問に向き合っていたのか、香川大学の講師 3 名が語り合います。

主催：香川大学生涯学習教育研究センター 後援：多度津町教育委員会 協力：香川県教育委員会



上：チラシ  
 右上、右下：当日の様子

## II-4. 猪熊家住宅(東かがわ市)

香川県指定有形文化財(昭和29年8月18日指定)の猪熊家住宅は、寛文4(1664)年、隣接する白鳥神社が高松松平藩初代藩主の松平頼重により再興されるにあたり、神主住宅として建てられたと言われている(指定されたのは母屋、門(通称大門)、長屋(通称長屋門))。神主には京都の平野神社から猪熊兼古が招かれたことから、猪熊家住宅と称されている。

猪熊家住宅は以前は邸内に展示品を並べ公開していたが、近年は非公開となっていた。平成28年度から29年度にかけて土塀や屋根などの保存修理事業が実施されており、これを機会に改めて公開したいという当主の意向から、平成30年度の事業実施に至った<sup>2)</sup>。

平成30年度は再び教育学部社会教育課題研究Ⅱで活用方法を検討する方式に戻し、公開イベントの開催、パンフレット作成の二本立てで実施した。

公開イベントは、12月2日(日)、一般成人対象の公開セミナー「猪熊邸現地講演会～保存修理事業の全容をお見せします～」(主催：香川大学地域連携・生涯学習センター、後援：東かがわ市教育委員会、協力：香川県教育委員会)として実施した。午前・午後の二部制としたが、内容はどちらも同じで、はじめに当主であり東かがわ市教育委員会事務局生涯学習課の猪熊全徳氏が保存修理事業の概要を説明し、続いて創造工学部の釜床美也子助教による講演「猪熊邸のみどころ」、最後に邸内見学という流れであった(釜床助教は、猪熊家住宅の保存修理事業実施前に猪熊家住宅に関する調査<sup>3)</sup>を実施している)。当日の参加者は午前の部が31名、午後の部が27名と、当初募集人数として設定していた各20名を上回り、計58名であった。多くは東かがわ市在住で、中には以前長屋門に住んでいたという人もおり、その人を含めかつて

公開していた時代に来たことがある人と、はじめて訪問する人が、半々であった。アンケートには「長年ず〜っと公開の機会を待ち望んで居りました。」「一般公開を早めをお願いします。」「見学の回数を増やしてほしい。」「大変よかった。又来たい。」と、今後の公開を望む声が多数見られた。

パンフレットは、猪熊家住宅に関する先行研究<sup>4)</sup>に基づき、社会教育課題研究Ⅱの履修学生(1名)と、猪熊氏、筆者の3名で執筆した。作成にあたって、猪熊家住宅および周辺地域の現地見学を3回(5月10日、5月24日、7月19日)、香川大学での検討会を3回(8月28日、9月26日、11月15日)、合計6回の会合を開き、本文の検討を重ねた。タイトルは『猪熊家住宅10のヒミツ』で、10問のクイズと解説からなっている(A5版、全16頁、カラー刷、1000部)。クイズは、以下の通りである(下線が引いてあるものが正解、ふりがな・写真は略)。

- Q 1. 猪熊家住宅は「猪熊さんのお家」として建てられたものです。  
では、この家に最初に住んだ猪熊兼古とは、何者でしょうか。  
A. 漁師      B. 武士      C. 神社の神主
- Q 2. 猪熊家住宅はいつ頃建てられたのでしょうか。  
A. 奈良時代      B. 鎌倉時代      C. 江戸時代
- Q 3. 猪熊家住宅の大門(正面向かって左の門)は、かつて一部の限られた人だけしか通れませんでした。  
では、この門を通ることを許された人は誰でしょうか。  
A. お殿さま      B. 芸人・役者      C. 猪熊家住宅の住人
- Q 4. 猪熊家住宅には地域を治める役所のような役割がありました。江戸時代の終わりごろの史料にここで働いていた人数が書かれていますが、どれだけの人数でしょうか(家族は除きます)。  
A. 14人      B. 54人      C. 104人
- Q 5. 猪熊家住宅の母屋は、部屋によって床の高さが異なります。なぜ高さが違うのでしょうか。  
A. 泥棒をつまづかせるため      B. 足腰を鍛えるため  
C. 入室できる人の地位の違いを表すため
- Q 6. 猪熊家住宅の母屋は昔ながらの素材で作られています。  
母屋の屋根について、次の中で使っていない素材はどれでしょうか?  
A. 草(ワラやカヤ)      B. 木      C. レンガ
- Q 7. 猪熊家住宅は、家としてだけでなく、いろいろな役割をになうことができました。  
次の中で、なっていないものはどれでしょう。  
A. 小学校      B. 病院      C. 消防署
- Q 8. この写真の手紙は、江戸時代の有名人から猪熊家に送られてきました。誰からの手紙でしょう。  
A. 徳川家康      B. 水戸黄門      C. 平賀源内
- Q 9. 猪熊家住宅には昔の道具がたくさんあります。写真の道具は、何をする道具でしょう。  
A. 音を出す(スピーカー)      B. 光を出す(電気スタンド)      C. 冷たい風を出す(クーラー)
- Q 10. 猪熊家住宅の壁はその多くが土壁です。土壁は、その特徴によっていろいろな種類に分けられます。猪熊家住宅の長屋門の壁は、何という種類の壁でしょう。  
A. うなぎ壁      B. なまこ壁      C. めだか壁

平成30年度 香川大学公開セミナー

# 猪熊邸 現地講演会

～保存修理事業の全容をお見せします～



日時：12月2日(日) 午前の部 10:30～12:00 午後の部 13:30～15:00  
 会場：猪熊邸 (東かがわ市松原 166 番地 1)  
 講師：釜床美世子 (創造工学部助教 専門分野：建築構法) **無料**  
 対象：午前の部・午後の部 それぞれ 20名 (要事前申込、先着順)  
 申込：東かがわ市教育委員会事務局 生涯学習課まで TEL：0879-26-1238  
 (申込受付期間 11月1日(木)～11月30日(金) 平日 8:30～17:15)  
 ※小雨決行 (警報発令の場合は中止)。お車でお越しの場合は、白鳥松原駐車場をご利用ください。

香川県内の文化財を会場とする香川大学公開セミナー。今年には東かがわ市の猪熊家住宅(通称・猪熊邸)で開催します！猪熊邸は、江戸時代のはじめ、京都・平野神社から白鳥神社に招かれた猪熊兼古が、讃岐高松藩主・松平頼重から頂いたものです。小大名の住居形式(陣屋通り)の面影を残しており、この種の建物としては関西随一の大きさと書われています。猪熊邸では平成 28～29 年度に土壁や屋根などの保存修理事業を行いました。事業について概要を紹介するとともに、建築構法の専門家により猪熊邸のみどころも解説いたします。 ※当日の内容：事業の概要/講演「猪熊邸のみどころ」/屋内見学

主催：香川大学地域連携・生涯学習センター 後援：東かがわ市教育委員会 協力：香川県教育委員会

上：チラシ  
 右上：パンフレット  
 右下：当日の様子



### Ⅲ. 成果と課題

本事業の成果は、モデル事業の実施、フィールドワークによる教育効果、広報および社会への問題提起の、おおむね3つにまとめられる。

第一は4つの文化財建造物でモデル事業を実施したことである。本稿冒頭で述べたとおり、県および市町の教育委員会事務局文化財部門では、文化財活用がその業務の一端に加えられているものの、予算、担当職員数の不足などから活用に関しては十分な取組が行えているとは言い難い。そのような問題関心に基き実施した本事業には、次のような特徴があった。一つ目は、香川県における文化財行政を統括する立場にある香川県教委生涯学習・文化財課が大学と市町の文化財担当者とのコーディネーター役となり、実際に事業を実施する段では大学と市町との連携で行ったこと。二つ目は、事業実施に際し、学生の視点を最大限取り入れるよう努めたことである。そもそも、平成27年度に事業をはじめた際、最も期待していたのは学生の役割であった。地域にある文化財に親しもうとする取組はこれまでもなかったわけではないのだが、文化財の専門家が行くと専門的になりすぎるきらいがある。一部の高度な知識を求める人々のニーズには応えているかもしれないが、多くの人には「文化財は難しい」とかえって敬遠されかねない。そこで、必ずしも文化財の研究をしているわけではない学生に「翻訳者」を担ってもらい、高度な専門知識を使わずに、それぞれの文化財の価値を分かりやすく一般の人に伝える方法を検討することとなったのである。パンフレット作成にあたり、クイズを多く取り入れたのは、そのような事情による。

第二に学生に対する教育的効果である。学生は、単に文化財活用の理論や、他都市の事例を学んだだけではない。とりわけ平成28年度の宇多津町、平成30年度の東かがわ市での取組については、現場の担当職

員と頻繁な打ち合わせをしながら各種事業を実施した。現場の課題に担当職員と一緒に取り組むという「実践的フィールドワーク」によって、現場で働くための実践力を養うことができたことは間違いない。社会教育課題研究（ⅠⅡで計4単位）は2020年度以降実習が必修化されることになっているが、それを先取りする取組だったと言えよう。

第三は広報および社会への問題提起である。本事業については、四国新聞や、文化財の所在する自治体の広報紙で取り上げられ、また県議会で質問が出るなど注目を集めた。文化財建造物そのものについて広報すること、あるいは文化財活用の厳しい現状について問題提起をすることができた。

一方で課題もある。本事業は、各年度、それぞれ一回限りのイベントを実施したにすぎない。平成29年度以外はパンフレットを作成しており、ワークショップ等、当日の内容を後日活用できるよう工夫したものの、それらがどの程度実際に活用されているかは不明である。本事業は、ワークショップ実施経費、パンフレット作成費、学生の現地までの往復旅費、等々、その多くは大学のフィールドワーク経費で実施したものである（平成29年度を除く）。しかし、大学の経費のみに依存しては、県・市町の取組は進まない。

加えて、本事業の最大の特徴が学生の視点をいかすことである以上、学生が継続的にかかわる仕組みが必要であるが、それが難しくなっていることも課題である。平成27年度から4年間、筆者が担当している教育学部社会教育課題研究Ⅱの授業の一環として取り組んだが、香川大学教育学部の再編により人間発達環境課程が廃止されたことで、以前は10名を超えていた当科目を履修する学生が近年激減している（平成29年度は0名で不開講、平成30年度は履修学生はいたものの1名であった）。県・市町の文化財担当からは平成31年度以降の継続が期待されているが、前途は厳しいと言わざるを得ない。現場職員とともに企画・実施する取組は、学生の学習効果も大きい。現場の課題解決に直接かかわる本事業のような取組を継続する方法について、検討が必要である。

いずれにせよ、本事業が一つのモデルケースとなり、今後の文化財活用の端緒となることを期待したい。

## 謝辞

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課の文化財担当、松岡明子氏、三好賢子氏、大山裕矢氏には大変お世話になりました。とりわけ、平成26年度に松岡氏からの相談がなければ実現することはありませんでした。また、本事業は香川大学の「地域社会連携型フィールドワーク科目拡充支援事業」（平成27年度、平成30年度）および「自治体連携型」地域志向教育支援事業」（平成28年度）の補助金を得て実施したものです。この場を借りて関係各位に篤く御礼申し上げます。

## [注]

- 1) 主な参考文献は以下の通り。宇夫階神社遷座千二百年式年祭実行委員会編『宇夫階神社：宇多津の心守～宇夫階神社遷座千二百年記念～』2007年。松岡明子「近世の宇多津を描いた景観図～「宇多津街道図」と「網浦眺望青山真景図絵馬」～」、『宇多津町文化財保護協会会報』第17号、2007年6月、pp.17-27。宇多津町誌編纂委員会編『続宇多津町誌：うたづ』2010年。伊勢神宮公式ホームページ <http://www.isejingu.or.jp/>（2019年2月閲覧）。
- 2) 保存修理期間中の平成29（2017）年3月6日および7月5日にも、東かがわ市教育委員会の主催で、近隣の東かがわ市立本町小学校3～6年生を対象とする保存修理事業見学会を実施している（共催：香川県教育委員会、協力：（有）夢和詩生伝統建築研究所、（株）藤木工務店四国支店）。その様子については（株）藤木工務店発行の『すまいる通信【春号】』『すまいる通信

【夏号】に詳しいが、例えば、2回目では土堀の下塗り体験を行っている。ただし、成人には同様の見学会は実施しておらず、検討課題であった。

- 3) 宮本慎宏・釜床美也子『猪熊家住宅の建築的・歴史的価値に関する研究 調査・研究報告書』2016年3月。釜床美也子・宮本慎宏「香川県指定文化財猪熊家住宅母屋の改造履歴に関する研究」、『日本建築学会技術報告集』第23巻第54号、2017年6月、pp.715-720。
- 4) 上記以外に参照した主な文献は以下の通り。松浦正一「白鳥神社と猪熊家」、『文化財協会報』第53号、1970年8月、pp.1-4。白鳥町史編集委員会『白鳥町史』1985年。東かがわ市歴史民俗資料館『企画展：江戸時代の神主邸宅・猪熊家住宅～受け継がれる歴史と技術～』パンフレット（開催期間：平成30年3月12日～7月16日）。